

可能性と否定  
—動詞「限る」の否定形—

Possibility and Negation: On the Negative Form of Japanese Verb “KAGIRU”

宮崎和人  
MIYAZAKI, Kazuhito

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第57号 2024年3月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.57 2024

# 可能性と否定

## —動詞「限る」の否定形—

宮崎 和人

### 1. はじめに

可能性という意味は、否定とどのようにかわるのだろうか。可能性はあつたりなかつたりするから、可能性をあらわす文には、可能性の有無に対応して、肯定と否定の対立があるだろう。また、可能性があるとかないとかいう場合にその対象となるできごとのほうにも、その存在・非存在に対応して、肯定と否定の対立がある。たとえば、「～可能性がある」という迂言的な可能性の形式には、「する可能性がある」「しない可能性がある」「する可能性はない」「しない可能性はない」といったパラダイムが成立する。

しかし、このパラダイムはすべての可能性の形式に成立するわけではない。「しうる」の否定形は、可能性がないことをあらわす「しえない」があるのみである。また、「～可能性がある」と同じく「～がある」というパターンの形式でも、「～疑いがある」には「～疑いはない」という否定のかたちが欠けている<sup>1</sup>。ほかにも、「しかねない」のように肯定のかたち（「しかねる」）があつても、みとめ方の対立になっていないものや、「しても不思議ではない」「してもおかしくない」などのように、可能性の意味の構成に否定の意味がかかわっているために、否定のかたちで固定されている可能性の形式もある。

本稿では、この最後のタイプの可能性の形式として、動詞「限る」の否定形「限らない」からつくられる可能性の形式（具体的には、「～とは限らない」「～とも限らない」）をもつ文の意味的・文法的な特徴を小説の用例を用いて記述していく<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> 次のような「～に疑いはない」は「～疑いがある」に対する否定の形式ではない。「破損状況を詳しく調べた米国の航空専門家によると、「貨物室のドアが事故の原因であることに疑いはない。何かのひょうしにドアが吹き飛び、そのショックで付近の機体の一部もはぎ取られた、とみられる」という。」（朝日新聞1989年2月26日）「～疑いがある」の「疑い」はsuspectの意味であるが、こうした「～に疑いはない」の「疑い」はdoubtの意味である（宮崎2019）。

<sup>2</sup> 動詞「限る」は、中止形「限って」においても後置詞への文法化がみられる。それについては、宮崎（2010）で論じた。

## 2. 二つのタイプ

可能性の表現としての「限らない」には大きく二つのタイプがある。それは、直前にあらわれる助辞によって区別される。すなわち、「～とは限らない」と「～とも限らない」である。

- ・これに反対する人はいました。——いや、袈裟を洋服にかえたからって、それで人間が幸福になるとはかぎらない。現に日本人はこんなことになったじゃないか。日本人ばかりではない、世界中がこんなことになってしまったじゃないか。人間がおもい上って、我をたてて、何もかも自分の思いどおりにしようというやり方では、もうだめだ。少しはよくなっても、全体からいえばもっとわるくなる。(ビルマの堅琴)
- ・「然し人間は健康にしろ病気にしろ、どっちにしても脆いものですね。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」
- ・「先生もそんな事を考えて御出ですか」
- ・「いくら丈夫の私でも、満更考えない事ありません」(こころ)

これらの文の意味と機能についてはあとで詳しく述べるが、両者の違いとしてすぐにいえることは、「～とは限らない」の場合は、できごとの存在（するとは限らない）も非存在（しないとは限らない）も制限なくあらわれるが、「～とも限らない」のほうは、ほとんどの例で、できごとの非存在があらわされている。つまり、「しないとも限らない」がほとんどであり、「するとも限らない」はごく少数である。

なお、「限らない」の前にあらわれる助辞が「と」ではなく「に」である例もごくわずかながら存在するが、例外的とみなすことができるので、以下の記述では扱わないことにする。

- ・Elias Metschnikoff の楽天哲学が、未来に属している希望のように、人間の命をずっと延べることも、或は出来ないには限らないと思う。(妄想)
- ・お母あ様と御一しょに岩代を出てから、わたし共は恐ろしい人にばかり出逢ったが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢わぬにも限りません。(山椒太夫)

参考資料として、『新潮文庫の100冊 CD-ROM』に収録されている日本の小説から収集した用例数の分布を表にしておく（空欄は用例のなかった部分である）。「非過去」「過去」は「限る」のテンスである。

	とは		とも		WHとも	
	非過去	過去	非過去	過去	非過去	過去
スル	12	2			3	
シテイル	4	1				
シテクレル	1					
サレテイル	1					
シナイ	8		17	1	15	1
シナイモノ			1		1	
シテイナイ			2			
コトニナラナイ			1			
サレナイ	1		4	1	2	
シテシマワナイ	1		4			
シテシマエナイ			1			
シテクレナイ			3			
シナカッタ	1		1			
ある	1					
いる	1					
できる・可能動詞	4	1				
よい	1					
悪い	1					
ない			1		1	
できない・可能動詞	1		2			
なかった	1					
N	12					
そう (指示語)			1			
計	51	4	38	2	22	1

### 3. 「～とは限らない」の意味と機能

いわゆる文法化 (grammaticalization) の観点からすると、「～とは限らない」には、「～と限る」といった対立する肯定の形がなく、後述するように「不成立の可能性」をあらわす形式として成立しているとみてよいと思われるものの、「限定」の意味や否定の意味が残っており、文法化の程度は高くないといわなければならない。次のように、「不成立の可能性」をあらわさず、ただ限定さ

れないということをあらわす例も、わずかではあるが、みられる。

- ・明治以後、花女のすがたが最初にひとの目にとまったところは横浜であった。そこに、十一歳の童女が水のほとりをおもいでいた。ひとは迷子かとおもったそうである。しかし、つれがあった。つれは異人すなわちイギリス人と見られた。場所は横浜とはかぎらない。東京に、横須賀に、大坂に、神戸に、また札幌にまで、花女は転転とした。そして、つれはいつも異人。それがときにフランス人、ドイツ人、ロシヤ人、アメリカ人、イタリヤ人、中国人、ついに国籍不明のものにまでおよんだ。(喜寿童女)

この例は、「～だけではない」という意味であろう。一方、「～とは限らない」が可能性の意味で使用される典型的なディスコース構造は、次のようなものである。

- ・「では、そちらはいくらならいいのですか」

私が返答につまると、金は事務的な口調で言った。

「もしよければ、あなたの方の心づもりを教えてください」

一瞬、迷った。いくら頼まれたからといって、彼が韓国人と日本人のあいだで日本人の側に立ってものごとを進めてくれるとは限らない。敵か味方かわからないうちにこちらの手の内を明かしてよいものなのだろうか、とつまらないことを考えたのだ。(一瞬の夏)

- ・今でも、ふと、思うのですが、四月の初めでも寒い日があります。これも新しい言葉でいえば、寒冷前線が通過した日には気候はずれの寒さになります。老婆は殺された日、あまり肌寒いので、いったんしまいこんだ綿入れの袖無しを行李の中から引っぱりだして着たかもしれない。老人にはよくある癖です。すれば、綿入れを着ていたからといって何も冬とはかぎらないです。四月でもいっこうかまわないのです。つまり、小生の容疑者の犯行が成立するわけでございます。(点と線)

最初の例では、先行文「頼まれた」から推論によって導かれる自然な結論「こちらの側に立ってくれる」について、そうした結論は確実ではないこと、つまり、「日本人の側に立ってものごとを進めてくれない可能性もある」という意味をあらわしている。このように、「～とは限らない」は、推論の結論が確実であることを否定することによって、そうでない可能性があることをあらわすのである。二例めでは、先行文「綿入れを着ていた」から導かれる推論の結論である「冬である」は確実ではないこと、つまり、「冬でない可能性もある」という意味をあらわしている。

工藤(1997)によれば、否定形式のワケデハナイが使用されるディスコース構造の典型は、

- ・チーズを持ってきたからといって、ウイスキーをたくさん飲むわけではない。

のようなものであり、こうした「推論の結論の否定」をあらわすワケデハナイは、先行文P（この例では「チーズをもってきたこと」）から導きだされて当然な結論Q（この例では「ウイスキーをたくさん飲む」）を否定する。このディスコース構造は、上にみた、可能性をあらわす「～とは限らない」が使用される典型的なディスコース構造とよく似ているのだが、両者は意味が異なるので、基本的にいいかえはできない。この例には「たくさんは飲まない」という意味があるが、「たくさん飲むとは限らない」なら、「たくさん飲むことは確実にない＝たくさん飲まない可能性もある」という意味になる。結論を直接否定するか、結論の確実性を否定するかの違いである。

また、可能性をあらわす「～とは限らない」にとって、上にみたようなディスコース構造の成立は必須ではないようである（ワケデハナイも同様）。実際、次のような例がみられる。

- ・それには、頼るべき武器は潜水艦と飛行機しか無いが、空母搭載の小型機では、索敵距離も攻撃距離も、先ず互いに似たようなもので、必ずしも確実に一方的にアメリカ艦隊を叩けるとは限らない。（山本五十六）
- ・彼は口をとがらせて抗議し、身ぶり手ぶりを入れて球場の歓喜を説明しはじめる。ほくは頃合をみてそっと彼のまえに新しい紙と絵具をおくのだ。彼の眼の内側に、やがて白球がとび交い、群衆が起きあがれば、耐えられなくなって彼は絵筆をとる。ほんのちょっとしたきっかけで、無人の電車は帰途の超満員電車にまで発展するのだ。いつもおなじ手口で成功するとはかぎらないが、彼らひとりひとりの生活と性癖をのみこんでいさえしたら、きっと突破口は発見されるのだ。すくなくともほくはそう考えたい。（裸の王様）

これらの例には、推論の媒介はないが、それぞれ、「確実に一方的にアメリカ艦隊を叩けない可能性もある」「いつかはおなじ手口で成功しない可能性もある」といった意味をあらわしている。

「～とは限らない」が過去形と組み合わさった場合（あまり一般的な言い方ではないかもしれないが）も、上にのべたような意味の可能性をあらわす。見つかったのはいずれも否定形の例であるが、探せば肯定形の例もあるだろう。

- ・「一角獣という動物を竜や人魚のような空想の産物として捉えたものであり、それからこちらの方は」（と言って『動物たちの考古学』の方を手にとった）  
「一角獣が存在しなかったとは限らないという立場から、実証的にアプローチしたもののな。でもどちらも一角獣そのものについての記述は残念ながらあまり多くはないの。竜や小鬼なんかについての記述に比べるとちょっと意外なほど少ないわね。たぶん一角獣という存在がすごくひっそりとしているせいじゃないかと私は思うんだけど……。申しわけないけど、うちの図書館で私が入れることができたのはこれだけなの」（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

- ・危険な時間がちかづいて来る。冬の日短く、粉雪の夕方はさらに暮れるのが早い。賢一郎は滑って行く登美子の中腰になったうしろ姿を追うて、自分もゆっくりと滑りながら、この女は自分の危機を知っているのかしらと思った。知らないでいるとすれば感受性の不足であり、知っているにしては、まるで恐れを見せない。一番悪く解釈すれば、もはや幾度かの体験をもっているのかも知れない。登美子の性格と不用心な態度から考えれば、そういうことも無かったとは限らない。しかしまだ十八だ。むしろ原因は彼女の無知であると考えてもいいだろう。(青春の蹉跎)

それぞれ、「一角獣が存在した可能性がある」「そういうことがあった可能性もある」といいかえることができよう。そして、いずれも、推論の媒介はない。

一方、次のような例には、推論の媒介がある。すなわち、「強力な相手である」→「ミスをしない」、「小僧さんは厳格に仕込まれる」→「ホン物をよく見る様になる」という推論の結論が確実ではないとすることで、そうではない可能性を導入している。

- ・「しかしそれにはまだ少し時間がかかるし、うまくいけばそのあいだに我々もあんたもおのおの抱えた問題を解決することができるかもしれない。選択というのはそういうものなんだよ。たとえ一パーセントでも可能性が多い方を選ぶんだ。チェスと同じさ。チェックメイトされたら逃げる。逃げまわってるうちに相手がミスをするかもしれない。どんな強力な相手だってミスをしなとは限らないんだ。さて——」(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)
- ・小僧さんは厳格に仕込まれるから、馬鹿でない限り、年季次第で、ニセ物はよく見る様になるが、ホン物をよく見る様になるとは限らない。それはもう趣味とか個性とかが物を言う別の世界になるのだが、そういう世界で腕が振えないと、この商売では抜ける事が出来ないのが面白い。(真贋)

しかし、これらの例を「ミスをする可能性がある」「ホン物をよく見る様にならない可能性がある」にいいかえることはできない。いいかえるとすれば、「ミスをすることもありうる」「ホン物をよく見る様にならないこともありうる」であろう。このことには時間的限定性が関係している。これらの文のあらわすできごとには成り立つ時間の限定がない。「することもありうる」はそうした「ポテンシャルな可能性」をあらわす形式である<sup>3</sup>。

次のような例は、時間的限定性がない点は上の例と同じであるが（推論の媒介はある）、もはや可能性の意味をあらわしてはいないとみられる。

<sup>3</sup> 宮崎（2016）等を参照。そこでは、「することもありうる」を論理可能の形式と性格づけ、ポテンシャルな可能性との関係を説明している。ただし、「することもありうる」がアクチュアルな可能性（具体的な時間に存在する可能性）をあらわすこともある。これについては用法の拡張と考えている。

- ・日本ではどの大学に入るかが、その学生の将来に大きな影響を及ぼすのに反して、アメリカでは、卒業した大学の名は、さほど問題にされない。確かに、アメリカにも一流大学と呼ばれるハーバード、エール、プリンストン等があるが、日本の一流大学とは一流の意味が少々異なる。日本の一流大学には、最優秀の教授および学生が、全国各地からかき集められていると言えようが、アメリカでは、教授は別としても、最優秀の学生が集められているとは限らない。彼ら学生たちが、或るレベル以上に優秀であることは事実だが、同程度に優秀な学生は、アメリカ中の大学に、小さな地方大学にさえも、いくらかでも散らばっている。(若き数学者のアメリカ)
- ・「そうだ。日本だ。これが日本であることは、日本人は、だれでも知っている。これを知らない日本人は、ひとりもない。しかし、日本人が知っているからと言って、世界じゅうの者が、知っているとは限らないのである。世界には知らないやつが、たくさんある。日本を知らないやつが、世界にはたくさんあるんだということを、諸君は、まず、知らなければいけない。」(路傍の石)

それぞれの文脈をみればわかるが、これらの例の「～とは限らない」があらわしているのは、「不成立の可能性」ではない。ここでは、「～とは限らない」は程度否定（部分否定）をあらわすワケデハナイに近づいている。実際、上の二例の「～とは限らない」をワケデハナイにおきかえてもいいだろう。

程度否定（部分否定）をあらわすワケデハナイとは、

- ・「ですから選考の中心も学長でしょうが、でも学長一人で、すべてを決めるというわけでもありません」(脳は語らず、工藤1997より)

のようなものであるが、この例のワケデハナイを「～とは限らない」におきかえることはできない。上の二例についてはおきかえができるようにみえても、実際は、意味の変更をともっているのだろうか。さらに観察を進めよう。

今度は、時間的限定性がなく、「必ずしも」「常に」「みんな」「誰もが」など、否定と共起して部分否定になる副詞や名詞が共起している例をみる。こうした例も、ワケデハナイにいいかえられる。

- ・「無論、冗談ではない。唐突にこんなことを言い出しては、ふざけていると君は思うだろう。ほくはだいたい慎重な方で、何でもよく考えてから話をするが、実のことをいうと、いまのいままで、ふじ子さんを一生の妻にという考えはなかった。だが、一所懸命考えたことが必ずしもその人間の本音とは限らないし、突然思い立ったからと言って、それが軽薄とも嘘とも言えないのじゃないだろうか」(塩狩峠)



- ・その落ち着きぶりが私を少々興奮させたのか、思わず上ずりそうな声を抑えて、「それならなぜ、ほんの少しでも妥協するようにカールを説得しなかったのですか。とても理解できない。この世の中では、常に正義が通るとは限らないというのは常識ではないですか。正しいことだけが正しいのは、数学だけです」と、一気に言った。(若き数学者のアメリカ)
- ・「ですけど、教員資格なんて、そんなに大事なことなんでしょうか。資格のある先生だって、いい先生とはきまりませんし、資格のない先生は、必ずしも悪いとは限りません。ほくたちにとっては、資格なんて、あったって、なかったって、問題ではありません。教え方のうまい先生が、熱のある先生が、一番いい先生だと思っているんですけど……」(路傍の石)
- ・金もちだって、人間ではないか。  
金もちには不正な者が多い。  
しかし、貧乏人だって、みんな善人とは限らない。  
こんなふうに考えるのは、おれが金もちになりたいと思っているからかな。(路傍の石)
- ・その年の冬は、死ぬ患者が多かった。もう五年の昔になる。それはストレプトマイシンがそろそろ出廻り出した頃で、しかし、値段はまだ高く、誰でもがそれを使えるとは限らなかった。成形手術は普及したが、肺葉摘出手術はその緒に就いたばかりだった。冬は厳しく、死者は多かった。私たちはしばしば屍の通るのを見た。(草の花)

実は、この五例の前に挙げた二例のうちの最初の例も、「一流大学に最優秀の学生のすべてが集められているとは限らない」という意味であるし、二例めも「世界じゅうの者」とある。これらに共通する意味は、すべてのXにそのことが当てはまるわけではなく、例外があるという「一般化の不成立」である。ワケデハナイと「～とは限らない」はこの意味を媒介として相互にいいかえることができるようになると考えられる<sup>4</sup>。

以上のように、「～とは限らない」には、文法化の程度、ディスコース構造、時間的限定性に関してさまざまなものがあり、すべてが同じように可能性をあらわしているわけではない。

---

<sup>4</sup> 「学長一人ですべてを決めるわけではない」と「学長一人ですべてを決めるとは限らない」には大きなへだたりがあるが、それは、個別主体であり、時間的限定性があるからではないかと思われる。

#### 4. 「～とも限らない」の意味と機能

続いて、「～とも限らない」の意味と機能を記述していく。「～とも限らない」については、次の二つを区別する必要がある。

一つは、次の最初の例のように、疑問語をともなうもの。もう一つは、二つめの例のように、疑問語をともなわないものである。用例数は後者のほうが多い（約二倍）。

- ・ 私は稍安心した。私の変化を凝と見ていた先生は、それからこう付け足した。

「然し人間は健康にしる病気にしる、どっちにしても脆いものです。いつどんな事でどんな死にようをしないとも限らないから」

「先生もそんな事を考えて御出ですか」

「いくら丈夫の私でも、満更考えない事ありません」（こころ）

- ・ だが、ここで私が投げたら、内藤はどうなるのだ。私のようにボクシング界から逃げ出すこともできず、これからもボクシングを続けていくに違いない。恐らく、小さな試合に勝ったり負けたりしながら、残り少ない持ち時間を浪費していくことだろう。場合によっては、金のために噛ませ犬として買われていかないとも限らない。そうすれば、また六年前と同じことを繰り返させることになるのだ。（一瞬の夏）

両者に共通するのは、基本的にできごとをあらわす部分が動詞の否定形をとるということである（例外については後述する）。つまり、二重否定である。また、評価の意味をともなうことが多いことも共通している。ただし、後述するように、評価のしかたはかなり異なる。

まず、疑問語をともなう場合からみる。用例にあらわれた疑問語には、「いつ」「どんな（どのような）」「どこで」「どう」「だれ」があった（「いつどんな」「どこでどう」のように組み合わせて使用されることもある）。

以下、もっとも用例の多い「いつ」をともなう例からみていくことにしよう。

- ・ 「私はそのまま二三日過ごしました。その二三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは云うまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思ったのです。その上奥さんの調子や、御嬢さんの態度が、始終私を突っつくように刺戟するのですから、私は猶辛かったのです。何処か男らしい気性を具えた奥さんは、何時私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対する御嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言出来ません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。・・・」（こころ）

- ・ガダルカナル島の戦局は久しく前から極限にまでおし迫っていた。完全に制空権を奪われ補給はつかず、ガ島は餓島と呼ばれ、その守備隊の鬼気迫る悪戦苦闘ぶりはラバウルの基地員の間でも半ば伝説めいてしきりと取沙汰されていた。思いがけぬ強力な米軍の反攻、それは内地では想像もつかぬほど、ガダルカナル島から幾つかの島を距てたここラバウルではひしひしと感じられたし、またいつその運命がこの島を襲わないとも限らなかった。(楡家の人びと)

これらの例からわかるように、可能性をあらわす「いつ～とも限らない」は、常にその可能性（恐れ）があって、安心できないという意味、すなわち、実現の可能性の常在性という意味と「恐れ」という評価的意味<sup>5</sup>を複合的にとらえる表現である。「いつ～しても不思議ではない／おかしくない」もほぼ同じ意味をあらわす。

次に、「いつ」と別の疑問語（「どんな」「だれ」）の組み合わせの例を挙げる。

- ・この事件において、不運とか不幸としか呼びようのないことが、星につきまどっていた。阿片を扱うには特に慎重であれと、星はみなに注意していたし、担当の安楽常務もその性質から、きわめて注意ぶかく官庁関係の書類を整理保存していた。好意を持たぬ連中が、いつどんな横やりを入れないとも限らないからだ。(人民は弱し 官吏は強し)
- ・何故、言わなかったろう。丑松は歩きながら、自分で自分に尋ねて見る。亡父の言葉も有るから——叔父もああ忠告したから——一旦秘密が自分の口から泄れた以上は、それが何時誰の耳へ伝わらないとも限らない、先輩が細君へ話す、細君はまた女のことから到底秘密を守ってはくれまい、こういうことに成ると、それこそ最早回復が付かない——(破戒)

これらの例では、恐れの常在性に加え、「どんな横やりが入るか」「だれの耳へ伝わるか」ということも恐れの対象になっている。「秘密がいつだれかに伝わらないとも限らない」に比べ、「秘密がいつだれの耳へ伝わらないとも限らない」は、伝わる相手によっては困ったことになるという別のファクターが加わっているのである。それだけ恐れは強調されることになる。

次の例では、「どんなことで」によって、側杖をくうことを恐れるだけでなく、そのきっかけに際限がないことを恐れていることがあらわされている。

- ・そんなことをいうが、そら、この夏、神田の錦輝館でえらい騒ぎがあったじゃないか。」

---

<sup>5</sup> ほぼ否定的評価に限られており、筆者が収集した用例では、肯定的評価は次の一例のみであった。「そりゃそうかも知れないけれども、又ひょっとして、どんな好い口がないとも限らないんだから、早く頼んで置くに越した事はないよ」(こころ)

「ああ、赤旗事件ですか。新聞では見ていましたが……」

「わたしはあの時、偶然通り合わせたんだが、大勢ひっぱられるのを見て胆を冷したよ。あの方の連中と知っていたりすると、どんなことで側杖をくわないものとも限らない。頼むから、おまえ、このうちは出てもらいたいな。」(路傍の石)

時間的限定性についても触れておこう。疑問語をともなう「～とも限らない」は恐れをあらわしている。語り手や登場人物の恐れの対象は具体的なできごとであるから、そうした恐れをあらわす文には時間的限定性がある。それが基本的であり、以上に挙げた例がそうであった。ただし、次のような時間的限定性のない例も、多くはないが、みられる。

・お榎は何気なくいったのだが、光秀はその言葉に異常な響きを感じた。信長が上にいるかぎり——という表現は、それを聞く耳によっては重大な意味に受けとらぬともかぎらない。

「お榎、あまりそのような言いまわしを、他人の前でするな。他人というものは、どのような噂を立てぬともかぎらない」(国盗り物語)

なお、疑問語をともなう「～とも限らない」には、次のように、動詞の肯定形があらわれることがある。今回は三例が見つかったが、すべて「花埋み」の例である。個人的な癖とみられるが、二重否定に由来する可能性の表現であることが意識されなくなると、こうした例も増えてくるかもしれない<sup>6</sup>。

・志方は私の体の秘密を知らない。濃淋持ちの女だとは夢想だにしていない。女医で、敬虔な基督教徒で、矯風会の風俗部長が花柳病である。そんなことは吟子が直接言ったところで志方が信じるわけではない。今は治まっているが、いつ動き出すとも限らない。動き出せば志方にもうつる。(花埋み)

続いて、疑問語をともなわない「～とも限らない」に目を移そう。

・「ここまで来たら、宝塚へ出るのが一番順当だと思いますけれど」

「それどういう意味ですか、宮村さん。あなたは、私が帰りたいといったら、いつでも山からおりるっていついたでしょう」

「これからはずっと、おりる道なんです。途中から谷へおりる道もあるにはありますが、うっかりすると道を

<sup>6</sup> このほか、「～とは限らないし、～とも限らない」のように、「～とは限らない」の「は」を「も」に変えたものがみられるようである。

迷わないとも限りません。疲れたら、ゆっくり歩けば、いいんです。ゆっくり歩けば、間違いなく宝塚へつきます」（孤高の人）

- ・星は数名の社員を連れて保険会社に出かけ、その金を受取った。現金をいくつかに分け、何台かの自動車に分乗し、会社へと持ち帰った。銀行が利用できなくなると、このようにして運ばなければならないのだった。また、星がまとまった金を手にしたとの情報がもれると、途中で、無茶な差押えをされないと限らない。そんな場合、分乗していればつかまるのは一台ですむ。さいわい無事に帰りつくことができた。（人民は弱し 官吏は強し）
- ・それからスーパーマーケットの壁に貼られていたフランクフルトの観光ポスターを思いだした。川があって橋がかかっている白鳥が川面に浮かんでいるポスターだ。悪くなさそうな街だった。フランクフルトに行ってそこで人生を終えるのもなかなか悪くないように思える。しかし今から二十四時間以内にフランクフルトに到着することはまず不可能だろうし、もしそれが可能であるとしても十何時間も飛行機のシートにつめこまれて不味い機内食を食べさせられるのは問題外だった。それに実際に行ってみたらポスターで見た景色の方が良かったなんてことにならないとも限らないのだ。がっかりした気分で人生を終えるのだけはどうしても避けたかった。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）
- ・男は、水を求めて、流し場のまわりを、手当りしだいに、かきまわした。あらゆる化合物のなかで、水は、もっとも単純な化合物である。机の引き出しから、一円玉をひろうくらいの調子で、見つけ出せないともかぎらない。ほら、水のおいがしている。まぎれもない、水のおいだ。男はいきなり、水甕の底から、しめった砂をつかんで、口いっぱいにはおぼった。（砂の女）
- ・それだけでなくも混んでいる銀座で互いに左の方へ二歩避け、斜めに向き合って礼を交わすことなど、とうてい不可能だろう。だが、明治百年である。今年には誰かに会ったらサッと左へ二歩飛び、斜めに向いて静かに礼をしようと思う。交通事故にあつたりしたら、責任は明治百年に取ってもらおう。ひよっとすると、サッと飛びかわした瞬間に、大変な美人と衝突し、物のはずみで一緒にお茶でも、という事にならぬとも限らない。そうならば明治百年万歳である。（風に吹かれて）
- ・「それなら、どうですか、思いきって、おやりになったら……」  
「ですけども、とてもあなた、手まえどもふぜいに……」  
「そんなことはありませんよ。受け持ちの先生に、ご相談になってみたらどうです。また、何かいいちえがないとも限りませんよ。」（路傍の石）

これらの例をみればわかるように、疑問語をともわない「～とも限らない」についても評価的意味があることは明らかであるが、疑問語をともなう場合は否定的評価に偏っていたのに対して、こちらの場合は肯定的評価（後半の三例）も否定的評価（前半の三例）もあり、偏りが無いことが注目される。疑問語をともなう場合、疑問語は恐れを強調する働きをしていることを前にみたが、そうした方向での固定化が進んでいるということであろう。

また、時間的限定性の点でも、疑問語をともなう場合は時間的限定性がない例もみられたのに対して、疑問語をともなわない場合は時間的限定性がない例はほとんどないという違いがある（すぐ前の例を参照）。

では、これらの「～とも限らない」があらわす可能性の意味はどのようなものなのだろうか。まず、「～可能性がある」へのいいかえはまったく成り立たない。むしろ推量表現のカモシレナイにいいかえたほうが違和感は少ないが、やはりニュアンスが違う。

疑問語をともなわない「～とも限らない」と「～可能性がある」やカモシレナイとの違いとして押さえておかなければならないのは、やはり評価的意味の有無である。可能性の意味が評価的意味とどのようにしてむすびつくのかについては、まだわからないことが多いが、上に挙げた用例からいえるのは、疑問語をともなわない「～とも限らない」は、わずかな可能性（可能性がゼロではないこと）を問題にしているということである。人間には、前向きになろうとしてわずかな可能性に期待したり、悪い結果を避けるためにわずかな可能性に注目したりする傾向があるのではないか。それが慣習化され、「～とも限らない」にやきついたと考えておきたい。

なお、前にみたように、「～とは限らない」の用例に動詞の過去形が使用されているものが一例あったが、「～とも限らない」にも一例ある。こちらについてはやや違和感があり、上に述べたこともあてはまらないので、別ものとして扱いたいと思う。

- ・義経の行方について彼が無関心だった筈はあるまい。やがて、眼前の館は、関東勢の重圍の下に燃え上る。  
そんな予感が彼の胸を掠めなかったとも限らない。彼の頑丈な肉体の何処かで、忘れ果てたと信じた北面武士時代の血が騒ぐのを覚えたかも知れぬ。恐らく、彼は、汀の氷を長い間見詰めていたであろう。群がる苦痛がそのまま凍りつくまで。（西行）

## 5. おわりに

最後にまとめとして、「～とは限らない」と「～とも限らない」を対比しておきたい。対比にあたっては、構成要素の「は」と「も」の違いに還元する欲求にかられるが、ここではそうしない。例として、「来ないとは限らない」と「来ないとも限らない」で説明すると、「来ないとは限らない」も「来ないとも限らない」も、結論を「来ない」と限定することはできないと判断している。「限る」

という動詞の語彙的な意味はそのようなかたちでいかされている。そうしたかたちでこれらは「来る可能性」があることをあらわしている。可能性の高さについては、「来ないとは限らない」は論理的に「来る可能性」があると判断しているようであり、特に高い・低いはない。他方、疑問語をともなわない「来ないとも限らない」は可能性がゼロではないというとらえかたをしている。こうした可能性のとらえかたは、評価的感情と複合しやすい。そして、「～とも限らない」が疑問語をともなうことによって可能性は開放され、恐れ感情とむすびつく。このようにして、両者には、論理的・評価感情的という対立が生じているように思われる。

本稿は、最近の筆者の可能文研究の展開の一つである。一連の研究では、可能を（ヴォイスのみならず）モダリティーとして研究すること（および、その前提となるモダリティーの規定の見直し）が必要であること、時間的な側面が重要となること、可能文を体系的に整理するには、可能を条件づける要因の体系的な整理が必要であること（デオンティックな可能（規範可能や意志可能）を可能文として研究する必要があること）、一般性の高い記述を行うには、能力可能や条件可能といった狭義可能文だけでなく、可能性をあらわす文も可能文の一種として記述する必要があること、可能性をあらわす文の体系的な記述には時間的限定性・テンポラリティー・みとめかた・評価性に注目する必要があること、などを主張してきた。本稿は、この最後の主張に関してディスコース構造の観点を追加し、この主張の妥当性の強化をはかったことになる。

## 参考文献

- 工藤真由美（1997）「否定文とディスコース—「～ノデハナイ」と「～ワケデハナイ」—」『ことばの科学8』むぎ書房
- 仁田義雄（1981）「可能性・蓋然性を表す擬似ムード」『国語と国文学』58-5
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 三宅知宏（2017）「“イツ”と“カモシレナイ”の共起関係に関する覚書」『現代日本語研究』9
- 宮崎和人（2010）「動詞「限る」の中止形—その後置詞化をめぐる—」『国語語彙史の研究29』和泉書院
- 宮崎和人（2016）「論理的な可能性について」『岡山大学文学部紀要』65
- 宮崎和人（2018）「分析的な表現手段の存在意義—可能性の形式をめぐる—」藤田保幸・山崎誠編『形式語研究の現在』和泉書院
- 宮崎和人（2019）「可能性としての〈疑い〉」『岡山大学文学部紀要』72
- 宮崎和人（2020）「可能表現の研究をめぐる」『国語と国文学』97-10
- 宮崎和人（2021）「可能性表現と時間的限定性・テンポラリティー・評価性—「恐れがある」「危険がある」「懸念がある」—」『岡山大学文学部紀要』74

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』 くろしお出版

森山卓郎 (2002) 「可能性とその周辺—「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」—」『日本語学』 21-2

#### 付記

本稿は令和5年度JSPS科研費（課題番号20K00646）による成果の一部である。



